島崎藤村『夜明け前』論（下）

細川正義

三　『夜明け前』の方法と目的

『夜明け前』の「序の章」が書き始められるのは昭和四（一九二九）年四月である。執筆にまつわる回想として藤村は『夜明け前』第二部の連載が終了した翌年一月の「中央公論」に「覚書」と題して次のように記している。

この日記の著者は大脇信興といひ、通称を兵右衛門といふ。わたしの郷里の人で、今の大黒屋の当主大脇文平君の曾祖父に当る。この隠居は以前のわたしの家の上隣りに住み、郷里馬籠の宿場時代には宿役人の年寄役及び問屋後見として、わたしの祖父とは日夕相往来した間柄であつたらしい。この隠居の一番日記は文政九年、同じく十年、十一年の三ヶ年間の日記帳より成るもので、それをつけはじめたのは三十歳の頃かと思はれる。さういふ日記帳が二十七番までも文平君の家に仕舞つてあつた。最初のうちはわたしもあの隠居が二十七番の日記を残したこととのみ思つてゐたが、そのうちに文平君からまだ四冊残つてゐたと言つて送つてよこして呉れたのを見ると、実際は三十一番まであつて、隠居三十歳の頃から七十余歳まで、年代から云へば文政九年から明治三年までおよそ四十余年間に亙る街道生活の日記帳である。それを見ると、（略）およそ街道に関することはわたしのやうに宿場全盛の時代を知らないものにも手に取るやうに分る。昭和二年のはじめには、わたしはすでに『夜明け前』の腹案を立ててはゐたが、まだ街道といふものを通して父の時代に突き入る十分な勇気が持てなかつた。といふ

のは、わたしの祖父や父が長い街道生活の間に書き残したものもいろいろあつたらしいのであるが、日清戦争前の村の大火に父の蔵書は焼けて、参考となる旧い記録とても吾家にはさう多く残つてゐないからであつた。これなら安心して筆が執れるといふ気をわたしに起させたのも大黒屋日記であつた。その年にわたしは一夏か、つて大脇の隠居が残した日記の摘要をつくり、それから長い仕事の支度に取りか、つた。(1)

「昭和二年のはじめには、わたしはすでに（略）腹案を立ててはゐた」が、「街道といふものを通して父の時代に突き入る十分な勇気が持てなかつた」ので、書き出せずにいた藤村を促したのが、郷里の隣家大脇家に所蔵されていた大脇兵右衛門の書き残した日記、即ち「大黒屋日記」と称するものとの出会いであったことはつとに知られている。藤村はそれを大脇文平から借り受け、昭和三（一九二八）年五月から十二月までかかって「日記の摘要」を作る作業に専念し「大黒屋日記抄」として九冊のノートにまとめた。他に馬籠の蜂谷家所蔵の「八幡屋覚書」、山崎斌(2)所有の「山崎氏古帳」や「追分宿古帳」にも目を通し、この十二月から執筆が開始された。

藤村が『夜明け前』執筆を実際に意識したのは、すでに取り上げたが大正二（一九一三）年から五年にかけてのフランス行の時であることは、『夜明け前』連載が終わった昭和十（一九三五）年十二月に「新潮」に掲載された青野季吉との対談「夜明け前を中心として」のなかで次のように記しているところからも知ることが出来る。

島崎。（略）幼い時分には、親父はただ怖い人のやうに思つて居りました。さうですねえ、私が巴里へ参つた時は四十二の齢でございましたが、漸く四十代くらゐになつて親父の歌集などを、それも外国の旅で寂しいものですから、読んでみるうちに、親父の生涯などもまあ幾らか解つて来たやうな気持があつた。そして帰つて参つてから、自分が、父の生涯といふものを本当に一つ探してみよう、といふ風に思ひ立ったのが、あの作のつまり動機でございますね。(3)

父正樹の歌集『松が枝』は、大正元（一九一二）年十一月、藤村が正樹の記念碑を郷里の諏訪神社境内に建立した記念に編纂したもので、渡仏の際にも携えて行っている。暗いフランスの客車の中にあって、父のことを懐かしく想起

したことはすでに触れたが、亀井勝一郎が「作品のモチーフが、藤村の心に明確に自覚されたのは、大正二年から四年までのフランス滞在中であつたらう」と推察しているように、『松が枝』編纂が父のことを書く動機になったことがこの一文から知ることができる。そして、具体的に『夜明け前』執筆の開始を意識するようになって、静子宛に、

「松か枝」の写しは急ぎませんからよろしく。最近に私は父に関する古い書類を沢山手に入れました。これは父の生涯を知るによい手がかりとなるものばかりです。その中に私が一四五才の頃に東京から郷里の父宛てに送った手紙も一本出て来て思はず自分でほゝゑみました。その手紙は学校生徒の作文でも書くやうに幼い自分の志望などを述べたものでした。(4)

と書き送っているところからも、執筆の手がかりとして重要視していたことがわかる。そのように藤村が父正樹の人生とその彼の生きた時代とに注目するなかで、『夜明け前』が執筆されるようになったことがこの作品の性格を決定していることは言うまでもないが、藤村自らも、先にも引用したが、『夜明け前』執筆が完了した直後の「東京朝日新聞」長野版の昭和十（一九三五）年九月十五日談話記事で次のように述べている。

維新前後を上の方から書いた物語はたくさんある。私はそれを下から見上げた。明治維新は決して僅な人の力で出来たものではない。そこにはたくさんの下積の人たちがあつた。維新といふものが下級武士の力によつて出来たものだと説く人もございますが、私はさうではなしに庄屋たちがたくさん働いてゐる。それは世の中にあまり知られてゐない。私の「夜明け前」は、まア、歴史ぢやございませんが、維新前後の歴史を舞台として働いたさうした下積の人たちを中心とした物語でございます。(5)

更に、『夜明け前』執筆に際して資料収集から、整理などすべてに亙って協力した田中宇一郎の回想の中で、藤村が、起稿に際して直接田中に対し、

『どうです。歴史小説でもなければ、さうかと云つて普通の小説でもない、へんなものでせう。しかし、僕としては世間で所謂歴史小説を書くつもりではありません。歴史と云ふものを背景に採ると云ふ気持だけでね。』

と語ったことが取り上げられている。また、執筆に当たっての作者の意図を探ることができるものとして、後年「回顧」（父を追想して書いた国学上の私見）として述べた次の文章も注目する必要がある(6)。

過去こそ真実であるとは、多少なりとも今日を反省するたよりとしようと思ふものに取つて意味ある言葉となる。しかしながら、いかにして過去を探り求むべきか。過去が死物でないかぎり、この事は容易でない。わたし達が父の時代を考へて見る上にも、やはり同じやうなことが言へると思ふ。さういふ自分なぞ学問の家に生れたものでもないが、それでも祖父は学問を好み、父は平田篤胤没後の門人の一人であつたところから、自分もまた幼少の頃から国学といふものゝあることを知り、国学者の教養に就いて親しく見たり聞いたりしたことも少くはなかつた。(7)

藤村が、幕末維新前後の日本の歴史を語ることそのものを小説の主眼としたのではなく、むしろそれは藤村が「メロディ」と「伴奏」の関係で示した(8)、その「伴奏」の役割を果たすものとして取り入れられており、真の主眼は、その歴史を〈背景〉にして、激動のなかを懸命に生きぬいた父と、その父と同じ「下積みの」庶民の立場で、時代の激変をもろに受け止めて戦ってきた人たちの生き様の〈真実〉を凝視し、描きあげようとすることであったことが読み取れるであろう。

『夜明け前』には嘉永六（一八五三）年ペリーが軍艦四隻を率いて浦賀に来航し、徳川幕府に激震が走った、その父正樹二十三歳の年から、明治十九（一八八六）年に五十六歳で病死するまでの三十三年間の歴史を背景にして、その正樹をモデルとした木曾街道馬籠宿の一庄屋青山半蔵の半生を描いている。その描き方は、例えば『春を待ちつゝ』において、

私は少年時代を振返つて見て、自分の物心づく頃から明治二十年頃までの間はかなり暗かつた時代のやうに思ふ。おそらく西南戦争以前の十年間はもつと暗かつたらう。私達は明治維新と共に開けて来た新時代の輝いた方面のみを見るに慣らされて、その惨憺たる光景には兎角眼を塞ぎがちであつた。さういふ真相をも読みたい。(9)

と述べているが、これは明治維新後の黎明期のみならず、ペリーが浦賀に来航して以来の激変する華々しい政変劇の時期にも当てはまる。この『春を待ちつゝ』の一文が示しているように、藤村はそうした「歴史」に対峙して、彼は決して歴史の表舞台を「輝いた方面」の展開を中心にするのではなく、その大きな転変ゆえに不安と困難を強いられた庶民たちの「惨憺たる光景」に眼を注ぎつつ、「下から見上げ」る視点、即ちまさに「草叢の中」の視点に立って、日本の〈近代〉の原点の〈真実〉を問おうとしたのである。いうまでもなく、「歴史」の変化をどんなに精緻に描くよりも、庶民たちの実生活に深く眼差しを注いで描くことのほうが困難を極めたであろう。『大黒屋日記』だけでなく、一本の手紙に至るまで、あらゆる資料を求め、できるだけ正確な事実に立脚して舞台を設定していくことで、歴史から浮出する〈真実〉がよりリアルに描かれたともいえよう。先に藤村の言葉として「過去こそ真実である」を引用したが、『夜明け前』の中でも、

「君のいふ過去は死んだ過去でせう。ところが、篤胤先生なぞの考へた過去は生きてる過去です。明日は、明日はッて、みんな明日を待ってるけれど、そんな明日は何時まで待つても来やしません。今日は、君、瞬く間に通り過ぎて行く。過去こそ真(まこと)じゃありませんか。」

（第一部　第三章三）

と言わしめている。過去は単に事実を語るだけでなく、その「事実」の内側には人間の生きた証があり、普遍的〈真実〉がある。過去は現在を形成し、未来を暗示する。そのためにも過去を軽んじることなく可能な限り正確さを求め、凝視していく。そしてその緊迫を持って庶民の日常を描いていくことで、『夜明け前』が比類のない人間を中心とした歴史小説を作り上げているといえるのである。

四　『夜明け前』の半蔵と平田国学

『夜明け前』には安政三（一八五六）年に木曾街道で起った「牛方事件」を始め、諸国に起り始めた「百姓一揆」、「助郷制度」に対する庶民の不満など、徳川封建制度が堅牢な威力を有していた間には起りえなかった庶民の不満から生じた出来事を入念に描いている。そしてそれは青山半蔵の認識を改めさせる出来事として描かれている点に『夜明け前』の方法を窺うことが出来る。例えば「牛方事件」に対しての次の描写である。

下民百姓の眼をさまさせまいとすることは、長いこと上に立つ人達が封建時代に執つて来た方針であつた。しかし半蔵はこの街道筋に起つて来た見のがしがたい新しい現象として、あの牛方事件から受け入れた感銘を忘れなかつた。不正な問屋を相手に血戦を開き、抗争の意気で起つて来たのもあの牛行司であつたことを忘れなかつた。彼は旅で思ひがけなくその人から声を掛けられて見ると、仮令自分の位置が問屋側にあるとしても、そのために下層に黙つて働いてゐるやうな牛方仲間を笑へなかつた。

（第一部　第三章二）

あるいは「百姓一揆」については次のような箇所がある。

諸国には当時の厳禁なる百姓一揆も起りつゝあつた。しかし半蔵は、村の長老達が考へるやうにそれを単なる農民の謀反とは見做せなかつた。百姓一揆の処罰と言へば、軽いものは笞、入墨、追払い、重ひものは永牢、打首のやうな厳刑はありながら、進んでその苦痛を受けようとするほどの要求から動く百姓の誠実と、その犠牲的な精神とは、他の社会に見られないものである。当時の急務は、下民百姓を教へることではなくて、あべこべに下民百姓から教へられることであつた。

（第一部　第五章三）

半蔵は問屋・庄屋の立場にあるものとしては、少なくとも「村の長老達」と同じか、もっと権力の側の視点に立たなければならない。しかしここでは「牛方事件」を「感銘」をもって受け止め、「牛方仲間を笑へなかつた」という感

慨を示している。「百姓一揆」に対しても肯定的に受け止め、「下民百姓から教へられる」とまで認識しているのである。混沌の様相を示してきているとはいえ江戸時代にあってこのような現実認識、時代認識が容易になされるものではなかったことは、「村の長老達」の認識と比較してもわかる。即ち、そうした特異な認識に自然に改まっている青山半蔵を描くことに作品の特徴があったということも注目しなければならない。

そして、このような半蔵の認識を与えたものとして、平田派国学の影響を強調していることも『夜明け前』の方法として見逃せない。例えば次の箇所である。

> 中津川の友人香蔵から半蔵が借り受けた写本の中にも、このことが説いてある。それを見ると世には名も知らない隠れた人があつて、みんなが言はうとしてまだ言ひ得ないでゐることをよく言ひあらはして見せて呉れるやうな篤志家のあることが分かる。その写本の中には、かういふことが説いてある。建武の中興は上の思召しから出たことで、下々にある万民の心から起つたことではない。だから上の思召しが少し動けば忽ち武家の世となつてしまった。ところが今度多くのものが期待する復古は建武中興の時代とは違つて、草叢（くさむら）の中から起つて来た。さう説いてある。草叢の中が発起なのだ。（略）万民の心が変りさへしなければ、また武家の世の中に帰つて行くやうなことはない。さう説いてある。（略）
>
> 半蔵はこれを読んで復古の機運が熟したのは決して偶然でないことを思つた。彼の耳に聞きつける新しい声は、実にこの写本の筆者の所謂「草叢の中」から来たことをも思つた。
>
> （第一部　十二章六）

中津川の友人香蔵とは、平田国学の門人として半蔵と志を一つにするものである。半蔵が「万民の心」即ち庶民への肯定の眼差しを有することに影響を与えたものとして門弟同士が愛読する「写本」があったことがうかがえる箇所である。

父正樹が平田篤胤没後の門人となったのは、文久三（一八六三）年、正樹三十三歳の時であるが、『夜明け前』の半蔵は安政三（一八五六）年、十九歳の時に入門したことになっている。事実に立脚することの多い作品の展開におい

て、この七年間の変更は注目される。そこには藤村の意図、即ち半蔵の思想と認識において平田国学の影響をより強いものとして設定していることが窺える。

では、その事実を大幅に変更しての設定がどのような意図を持っていたかを探ってみる必要があろう。安政三年は、黒船が来航した嘉永六年の二年後であり、この年、「牛方事件」が起こっている。この頃から尊攘派は急速に活発化し、江戸幕府の権力は腐敗し、庶民の台頭が目立つようになってくる。そのような時代状況の中で半蔵を、正樹の実際より七年も繰り上げて平田派への入門をさせていることは、やはりそうした激動の時代にあって半蔵が平田派の思想を背景にして時代を見、乗り越えていこうとしていたかを中心に作品を展開させようとした作者の意図が推測されるところである。

『夜明け前』では、半蔵が平田派へ入門を決心したときのことを次のように描いている。

「君に悦んで貰ひたいことがある。自分はこの旅で、かねての平田入門の志を果さうとしてゐる。最近に自分は佐藤信淵（のぶひろ）の著書を手に入れて、あのすぐれた農学者が平田大人（うし）と同郷の人であることを知り、又、いかに大人の深い感化を受けた人であるかをも知つた。本居、平田諸大人の国学ほど世に誤解されてゐるものはない。古代の人に見るやうなあの直（す）ぐな心は、もう一度この世に求められないものか。どうかして自分等はあの出発点に帰りたい。そこからもう一度この世を見直したい。」

（第一部　第三章一）

平田派の国学は、今は「世に誤解されてゐる」かもしれない。しかし半蔵は篤胤の説く「古代の人に見るようなあの直ぐな心」を信じ、その「出発点」に立って「もう一度この世を見直したい」と願って平田国学に入門を決意したことが記されている。平田国学とは、平田篤胤によってひらかれたもので、篤胤は、安永五（一七七六）年秋田藩大番組大和田清兵衛の四男として生まれ、二十歳で脱藩。二十五歳で備中松山藩士平田藤兵衛の養子となっている。篤胤は本居宣長の弟子であるが、彼が宣長の門下に入ったのは二十八歳、享保三（一七一八）年の時であり、宣長死後二

年が経過していた。しかし、篤胤は、自分こそ宣長の正統を継承するものであるという強い自負にたって終始した。歌文の道からはいって古道へと沈潜していく宣長学に対し、古道の道を探究しようと構えた篤胤は、宣長の真の後継者であると自認したのである。篤胤は、古道を以て現実生活の規範となし、死後の魂の行方を知ることこそ、現世の安心の基であると考え、死後の霊魂は大国主神審判神として主宰する幽冥界に行くと説いて、神道的来世思想を打ち出したのである。半蔵がそうした篤胤の思想に共鳴して門人となったことは次の一文にも窺える。

国学者としての大きな先輩、本居宣長の遺した仕事はこの半蔵等に一層光つて見えるやうになつて来た。何と言つても言葉の鍵を握つたことはあの大人の強味で、それが三十五年に亙る古事記の研究ともなり、健全な国民性を古代に発見する端緒ともなつた。儒教といふ形であらはれて来てゐる北方支那の道徳、禅宗や道教の形であらはれて来てゐる南方支那の宗教――それらの異国の借り物をかなぐり捨て、一切の「漢(から)ごゝろ」をかなぐり捨てゝ、言挙げといふことも更になかつた神ながらのいにしへの代に帰れと教へたのが大人だ。大人から見ると、何の道かの道といふことは異国の沙汰で、所謂仁義礼譲孝悌忠信など、いふやかましい名をくさぐさ作り設けて、きびしく人間を縛りつけてしまつた人達のことを、もろこしの方では聖人と呼んでゐる。それを笑ふために出て来た人があの大人だ。大人が古代の探求から見つけて来たものは、「直毘の霊」の精神で、その言ふところを約(つづ)めて見ると、「自然(おのずから)に帰れ」と教へたことになる。より明るい世界への啓示も、古代復帰の夢想も、中世の否定も、人間の解放も、又は大人のあの恋愛観も、物のあはれの説も、すべてそこから出発してゐる。伊勢の国、飯高郡の民として、天明寛政の年代にこんな人が生きてゐたといふことすら、半蔵等の心には一つの驚きである。早く夜明けを告げに生れて来たやうな大人は、暗いこの世を後から歩いて来るもの、探るに任せて置いて、新しい世紀のやがてめぐつて来る享和元年の秋頃には既に過去の人であつた。半蔵等に言はせると、あの鈴の屋の翁こそ、「近つ代」の人の父とも呼ばるべき人であつた。

（第一部　第五章二）

本居宣長の「直毘の霊」の精神で、古代復帰を夢想し、「自然に帰れ」という考えに立って「時代」を見直して生きたいとする篤胤の思想を、自らの規範にして生きたいとする半蔵の考えが明確に記されているといえる。そして、そ

の古代復帰の思想が顕著に示されるものとして、王政復古の実現を求めた考え方につながる。『夜明け前』では次のように記している。

王政復古の実現も最早時の問題となった。

かういふ空気の中で、半蔵の耳には思ひがけない新しい声が聞えて来た。彼はその声を京都にゐる同門の人からも、名古屋にある有志からも、飯田方面の心あるものからも聞きつけた。

「王政の古（いにしえ）に復することは、建武中興の昔に帰ることであつてはならない。神武の創業にまで帰つていくことであらねばならない」

その声こそ彼が聞かうとして待ち侘びてゐたものだ。多くの国学者が夢みる古代復帰の夢がこんな風にして実現される日の近づいたばかりでなく、あの本居翁が書き遺したものにも暗示してある武家時代以前にまでこの復古を求める大勢が押し移りつゝあるといふことは、おそらく討幕の急先鋒をもつて任ずる長州の志士達ですら意外とするところであらうと彼には思はれた。

（第一部　第一二章六）

「王政復古」とは、元来十九世紀になって基盤が揺らいできた幕藩体制の強化という意図のもとに「水戸学」を中心に唱えられた「国体」の観念でありこれがやがて「尊王倒幕論」へと発展していった。しかし、『夜明け前』で藤村はそうした政治権力の視点においてではなく、「多くのものが期待する復古は建武中興の時代とは違つて、草叢の中から起つてきた」と記したように、長い封建時代の武士支配のもとで辛酸をなめさせられてきた庶民が真に解放され、自由を得られる世の中が到来することへの期待として意識されていることが想像される。それが「王政の古に復することは、建武中興の昔に帰ることであつては成らない。神武の創業にまで帰つていくことであらねばならない」という言葉に込められているといえるのである。

ところで篤胤自身は、天保十二（一八四一）年に幕府の忌諱に触れて、秋田に隠居をさせられている。半蔵の入門

の十五年前の出来事である。『夜明け前』で「本居、平田諸大人の国学ほど世に誤解されているものはない」（第一部三章一）と記しているように、必ずしも幕末の時代を牽引する程の勢力を有していたとは言い難い。藤村は、正樹の実際よりも七年も早く半蔵の平田国学入門を設定したように、半蔵と平田国学の関係に対しては明確な〈創作〉が施されているといえよう。そのことには平岡敏夫氏が、

「夜明け前」についてもべつに新しいことが言えそうもないのですが、今度「大黒屋日記抄」と対照しながら読みなおしてみて、逆につくづく藤村の創作ということを感じました。「大黒屋日記」はあくまでも島崎家以外の他人が書いた日記であり、枠以上のものになることはできていないようです。馬籠以外の土地でおこる事件はむろんのこと、青山家の内部、半蔵の内面等、決定的なことはほとんどこの「大黒屋日記」はこたえてくれていないのではないでしょうか。

と指摘しており[10]、『夜明け前』における青山半蔵像には、藤村の執筆の意図と方向によって、かなり入念な〈創作〉が施されていることを指摘している。その平岡氏が論証において取り上げている三好行雄は、

藤村の内部における父の像の変貌は、そのこと自体が藤村論の有力なテーマとなるが、ここで論及すべきことがらではあるまい。ただ、このことは青山半蔵が島崎正樹をモデルとしながら、実は具体的な形象化にあたつて、一種の理想化がそこにほどこされた事情を暗示する。論証抜きにいつておけば、他方では黒川村の百姓の描きかたにも示されたような事実や資料への全面的な依拠がありながら、主人公の人間像には父の事実をはみだした部分が多く認められる。しかも、それは単に父を理想化したというだけでなく、記憶をたどり、記録を綴つて復元された父の像と、そのようにして父を書く作家の〈私〉との複合体という性格を帯びるのである。「夜明け前」が一箇の客観的な歴史小説であると同時に、藤村そのひとの自己凝視が必然にたどりついたひとつの帰結でもあつったことの意味がそこにある。

というように青山半蔵に「一種の理想化」がみられると指摘している[11]。そして「記憶をたどり、記録を綴って復元された父の像と、そのようにして父を書く作家の〈私〉との複合体という性格を帯びる」ととらえている点が注目さ

れる。即ち、藤村の『夜明け前』を、父の記録を丹念にさぐり父の生きてきた姿を復元しようとする視点と、平田国学と半蔵の関係に重きを置く視点に於いて、平田国学の理念に共鳴する半蔵が、どこまでも庶民の立場に立って「王政復古」の新時代を待望し、彼自らも懸命に戦ってきた、という作者の立場においての認識と問いかけをもとにして半蔵像を描きあげようとする視点とを合わせた中で彷彿される青山半蔵を描こうとする藤村の方法において見ることができるのであり、『夜明け前』は、単なる事実に基づいた「歴史小説」ではなく、作者の反芻と問いかけの視点で描きあげられた世界であるといえよう。

五　『夜明け前』の主題

『夜明け前』が、半蔵の平田国学に基づいた真の「王政復古」の実現を期待し、その実現に向けて奔走する姿を中心に幕末を描いてきたのに対し、明治維新後はそうした期待が次々と失望に変わり、急変していく半蔵像を中心に描いているといえよう。その第一として、半蔵が平田国学を学ぶことで意を強くして一貫して求めてきた庶民（農民）の解放と自由の獲得への期待に対しての、庶民達との意識の乖離を痛感させられた次の出来事が上げられよう。

一行には、半蔵が親しい友人の景蔵、香蔵、それから十四五人の平田門人が軍の嚮導として随行して来た。あの同門の人達の輝かしい顔付こそ、半蔵が村の百姓等にもよく見て貰ひたかつたものだ。今度総督を迎へる前に、彼はさう思つた。もし岩倉公子の一行をこの辺鄙な山の中にも迎へることが出来たなら、おそらく村の百姓等は山家の酒を瓢箪にでも入れ、手造りにした物を皿にでも盛つて、一行の労苦をねぎらひたいと思ふほどの歓びに溢れることだらうかと。彼は又、さう思つた。長いこと百姓等が待ちに待つたのも、今日という今日ではなかつたか。昨日、一昨日のことを思ひめぐらすと、実に言葉にも尽されないほどの辛苦と艱難とを忍び、共に共に武家の奉公を耐（こら）へ続けたといふことも、この日の来るのを待ち受けるためではなかつたかと。さて、総督一行が来た。諸国の情実を問ひ、万民塗炭の苦を救はせられたいとの叡旨をもたらして来た。地方に

あるものは安堵して各自の世渡りせよ、年来苛政に苦しめられて来たもの、その他仔細あるものなぞは、遠慮なくその旨を本陣に届け出でよと言はれても、誰一人百姓の中から進んで来て下層に働く仲間のために強い訴えをするものがあるでもない。（略）宿内のものは勿論、近在から集まつて来てこの街道に群をなした村民は、結局、祭礼を見物する人達でしかない。庄屋風情ながらに新政府を護り立てようと思ふ心にかけては同門の人達にも劣るまいとする半蔵は、かうした村民の無関心に衝き当った。

（第二部　第四章一）

庄屋という、幕府の権力に与された側面を持つ立場でありながら、平田国学に理想を見、そこに新時代の実現を期待したものとしての進むべき道として、「庄屋風情ながらに新政府を護り立てようと思ふ心にかけては同門の人達にも劣るまいとする半蔵」は、新時代になっても村民達が、意外にも、案外「無関心」であることに驚かされた。これがまずはじめに抱かせられた半蔵の失望である。この村民たちの「無関心」の理由の一つには、引用箇所の時間、即ち慶応四年の頃には村民たちは、幕末・維新の混乱期にあって中山道の交通所得や山林から得られる副業的収入が減退したとはいえまだ日々の生活を脅かすほど切迫した状況になっていなかったことがあるかもしれない。しかし、

「そんなにみんな困るのか。困ると言へば、こんな際にはお互じゃないか。そんなら聞くが、一体、岩倉様の御通行は何月だったと思う。あの時に出たお救ひの御手当だって、みんなのところへ行き渡つた筈だ。」

「お前さまの前ですが、あんな御手当がいつまであらすか。みんな――とつくに飲んでしまったわなし。」

粗野ではあるが、併し朴直な兼吉の眼からは、百姓らしい涙がほろりとその膝の上に落ちた。

桑作は声もなく、ただただ頭を垂れて、朋輩の答へることに耳を傾けてゐた。やがて御辞儀をして、兼吉と共にその囲炉裏ばたを離れる時、桑作は桑作らしい僅かの言葉を半蔵のところへ残した。

「誰もお前さまに本当のことを言ふものがあらすか」

（第二部　第五章五）

といった箇所にも見られるように、次第に村民たちが半蔵の〈理想〉と乖離していく場面が目立つようになる。しかしそのなかにあっても、半蔵はひたすら新政府の施策に期待をしようとする。

消えうせべくもない感銘の忘れがたさから、彼はあの新時代の先駆のやうな東山道軍が岩倉公子を総督にして西からこの木曽街道を進んで来た時の思ひを馳せた。当時は新政府の信用もまだ一般には薄かつた。沿道諸藩の向背のほども測りがたかつた。何よりも先づ人民の厚い信頼に待たねばならないとして、あの東山道総督執事が地方人民に応援を求める意味の布告を発したことは一度や二度にとゞまらなかつた。このたび進発の勅命を蒙ったのは、一方に諸国の情実を問い、万民塗炭の苦を救はせられたき叡旨であるぞと触れ出されたのもあの時であつた。徳川支配地は勿論、諸藩の領分に至るまで、年来苛政に苦しめられて来たもの、その仔細あるものなどは、遠慮なくその旨を本陣に届け出よと言われ、彼も本陣役の一人として直接その衝に当つたことはまだ彼には昨日のことのやうでもある。彼半蔵のやうな愚直なものが忘れようとして忘れられないのは、民意の尊重を約束して出発したあの新政府の意気込みであつた。彼が多くの街道仲間の不平を排しても、本陣を捨て、問屋を捨て、庄屋を捨てたというのは、新政府の代理人ともいふべき官吏にこの約束を行つて貰ひたいからであった。

（第二部　第八章五）

「民意の尊重を約束して出発したあの新政府の意気込」に期待し、「多くの街道仲間の不平を排しても、本陣を捨て、問屋を捨て、庄屋を捨て」てまで新時代の施策に託そうとしたにもかかわらず、政府もそして最もよりどころとしてきた村民たちも半蔵の期待を裏切る様子を見せるようになる。そして、その認識を更に強く感じさせる結果となったのが、木曾の村の庄屋として、最も腐心してきた「山林問題」に対して、新政府が明治五年に発令した村民への強化施策である。

木曾の「山林問題」というのは、古くは、尾張藩が宝永五（一七〇八）年、木曾の森林資源保護策として「停止木の制度」を打ち出し、ヒノキやサワラなど五種類の木の伐採を禁じたことから始まる。しかしその策は、立ち入りを禁じた留山に対し、開放林の明山と称する山が定められており、全体の九割を超えていた。そこでの家作木や薪炭木を採ることは許されていたのだが、新政府は「停止木は即ち官木、官木の有る所は総て官有地」という考えで、ことごとく村民の立ち入りを制限する策を打ち出した。この間の事情を次のように書きとめている。

もともとこの山林事件は明治初年にはじまつた問題でもなく、実は旧領主と人民との間に続いた長い紛争の種で、御停止木のことは木曽谷第一の苦痛であるとされてゐた。こんなに明治になつてまた活き返つて来たといふのも、決して偶然ではない。それは宿村の行詰りによることは勿論であるが、一つには明治もまだその早い頃で、あらゆるものに復古の機運が動いてゐたからであつた。当時、深い草叢の中にあるものまでが時節の到来を感じ、より善い世の中を約束するやうな新しい政治を待ち受けた。従来の陋習を破って天地の公道に基くべしと仰せ出された御誓文の深さは、何程の希望を多くの民に抱かせたことか。半蔵等が山林に眼をつけ、今更のやうに豊富な桧木、椹、明桧、高野槇、それからねずこなどの繁茂する森林地帯の深さに驚き、それらのみずみずしい五木がみな享保時代からの御停止木であるにも驚き、そこに疲弊した宿村の救ひを見出さうとしたことは無理だつたらうか。彼等が復古の出来ると思つた証拠には、最初の嘆願書にも御誓文の中の言葉を引いて、厚い慈悲を請う意味のことを書き出したのでも分る。やがて、筑摩県の支庁も木曽福島の方に設けられ、権中属の本山盛徳が主任の官吏として木曾の村々へ派出される日を迎へ手見ると、この人はまた以前の土屋総蔵なぞとは打つて変わつた態度をとつた。（略）本山盛徳は御停止木の解禁なぞは以ての外であるとなし、木曽谷諸村の山地はもとより、五種の禁止木のあるところだとの理由の下に、それらの土地をも併せすべて官有地と心得よとの旨を口達した。この福島支庁の主任が言ふやうにすれば、五木といふ五木の生長するところは悉く官有地なりとされ、従来の慣例奈何に関はらず、官有林に編入せられることになる。これには人民一同狼狽してしまった。

（第二部　第八章二）

「停止木」のために長い間苦痛を負わされてきた村民たちが、「より善い世の中を約束するやうな新しい政治を待ち受けた」にもかかわらず、新政府は「五木といふ五木の生長するところは悉く官有地なりとされ、従来の慣例奈何に関はらず、官有林に編入」してしまったために、江戸時代よりもいっそう状況は悪化し、村民たちは意外な展開に「狼狽」してしまった。明治二（一八六九）年「問屋・年寄役」の廃止、五（一八七二）年には「本陣、問屋」が廃止され、半蔵は戸長を命ぜられる。そして、次々になされる変革に次第に戸惑いを隠せなくなる半蔵像が浮き彫りにされてくる。その中で、村民の生活の保障を考えて、半蔵は明治四（一八七一）年、明治二年に木曾三十三か村で一致し

て出した「停止木の廃止、山林開放」の嘆願書を今度は単独で改めて提出したのである。しかし結果は、山林の大部分を官有林とする強化施策を実施されることとなり、半蔵は「嘆願書」の責任を取らされた形で戸長を六（一八七三）年五月に罷免されたのである。「山林問題」に奔走する半蔵に対して、寿平次をはじめ周囲も批判するようになり、次第に孤立していく。その半蔵に精神の異変が現れるようになるのもこの頃である。作中では、妻お民の心情として次のように記している。

この里帰りには、お民は娘お粂のことばかりでなく、いくらか夫半蔵をも離れて見る時を持つた。妻籠に着いた翌日は午後から雨になつて、草木の蕾を誘うやうな四月らしい雨のしとしと降る音が、余計にその心持を引き出した。彼女の眼に映る夫は、父吉左衛門の亡くなつた頃を一区画として、何となく別の人である。どういふ変化が夫自身の内部に起つて来たとも彼女には言へないし、どういふもの、考え直しが行はれたとも言つて見ることは出来ないが、すくなくとも父の死に逢った頃は夫が半生のうちでも特別の時代であつた。連れ添つて見てそのことは分つた。幼少な時分から継母に仕へて身を慎んで来た夫に、晩かれ早かれ起るべきこの変化が来たことは不思議でないかも知れない。その考へから、それとない人の噂にも彼女はよく耳を傾ける。妻籠の人達の言ふことを聞いて見たいと思ふのもそのためであつた。（第二部　第七章四）

戸長を罷免され、旧庄屋としての立場も失い、更に精神の異変すら周囲に感じさせるようになっていく明治維新後の半蔵は、完全に敗北者の位置に立たされる。「御一新の成就といふことを心掛けて、せめて斯ういふ時の役に立ちたいと願」（第二部第九章一）い、村民達にとってもっとも切実な問題である「山林問題」に奔走した結果、長年馬籠の地にあって培ってきた地位と信頼のことごとくを失っていく。更に明治七（一八七四）年に勤めることになった教部省においても新政府に対する失望を一層深くしていったのである。

しかし、半蔵が教部省を去らうとしたのは、こんな同僚とのいきさつによるばかりではない。何と言っても、以前の神祇局は師平田鉄胤をはじめ、樹下茂国、六人部雅楽、福羽美静等の平田派の諸先輩が御一新の文教あるひは神社行政の上に重要な

役割をつとめた中心の舞台である。（略）半蔵がこんな縁故の深いところに来て見た頃は、追々と役所も改まり、人も替わりしてゐたが、それでも鉄胤老先生が神祇官判事として在職した当時の記録は、いろいろと役所に残つてゐた。ちょうど草の香で一ぱいな故国を訪ふ心は、半蔵が教部省内の一隅に身を置いた時の心であつた。彼はそれらの諸記録をくりひろげる度に、あそこに誰の名があつた、こゝに誰の名があつたと言つて見て、平田一門の諸先輩によつて代表された中世否定の運動をそこに見渡すことが出来るように思つた。（略）

半蔵が教部省に出て仕へたのは、こんな一大変革の後をうけて神社寺院の整理もやゝ端緒に就いたばかりの頃であつた。かねて神祇官時代には最も重要な地位に置かれてあった祭祀の式典すら、彼の来て見た頃にはすでに式部寮の所管に移されて、その一事だけでも役所の仕事が平田派諸先輩によつて創められた出発当時の意気込みを失つたことを語つていた。すべてが試みの時であつたとは言へ、各自に信仰を異にし意見を異にし気質を異にする神官僧侶を合同し、これを教導職に補任して、広く国民の教化を行はうと企てたことは、言はゞ教部省第一の使命ではあつたが、この企ての失敗に終るべきことは教部省内の役人達ですら次第にそれに感づいてゐた。

（第二部第十一章二）

こうした新政府の政治姿勢に対する動きは、半蔵のみならず、平田国学を信じ、それを礎にして維新の変動の中を懸命に生きてきた者たちの多くに深い失望を抱かせたのは言うまでもない。

その時になると多くの国学者はみな進むに難い時勢に際会した。半蔵が同門の諸先輩ですら、ややもすれば激しい潮流のために押し流されさうに見えて来た。（略）最も古いところに着眼して、しかも最も新しい路を後から来るものに教へたのは国学者仲間の先達であった。あの賀茂真淵　あたりまでは、まだそれでもおもに万葉を探ることであつた。その遺志をついだ本居宣長が終生の事業として古事記を探るやうになって、はじめて古代の全き貌を明るみに持ち出すことが出来た。そこから、一つの精神が生れた。この精神は多くの夢想の人の胸に宿つた。後の平田篤胤、及び平田派諸門人次第に実行を思う心は先ずそこに胚胎した。何と言つても「言葉」から歴史に入つたことは彼等の強みで、そこから彼等は懐古でなしに、復古といふことをつかんで来た。彼等は健全な国民性を遠い古代に発見することによって、その可能を信じた。それには先ず虚偽を排することから始めようとしたのも本居宣長であった。情をも撓めず慾をも厭はない生の肯定はこの先達が後から歩いて来るものに

遺して置いて行つた宿題である。その意味から言つても、国学は近つ代の学問の一つで、何もそうにわかに時世遅れとされるいわれはないのであつた。（略）

いかに平田門人としての半蔵なぞがやきもきしても、この頽勢をどうすることも出来ない。大きな自然の懐の中にあるもので、盛りあがつて衰へのないものはないやうに、一代の学問もまたこの例には泄れないのか。その考へが彼を悲しませた。彼には心に掛るかずかずのことがあつて、このまゝ都を立ち去るに忍びなかつた。

（第二部　第十一章四）

新政府の「神道国政化政策」は、〈外国〉からの反対にあったこともあり頓挫してしまい、今度は急速に仏教が息を吹き返してきた。その勢いに押され、政府は神祇局を廃止し、明治四年には神祇局から変更された神祇省も廃止し、教部省で統括するようになった。その教部省も「平田派諸先輩によつて創められた出発当時の意気込みを失」う方向に変更されていき、今度は国学者たちが「時世遅れ」と非難されるようになってきた。半蔵の敗北感は、こうした国学に対する批判が強まる中で一層痛切感を極めてくるのである。このように変化してくる半蔵像に対して、十川信介氏は次のように指摘している。

半蔵という一個人の生涯と維新の動乱という歴史的な時間とは重なり合い、「おてんたうさま」を仰ぐこともできない、彼の暗さと古い自己を破壊することのみ知って新しい自己を確立する方向性を持ちえぬわが国の昏迷とは通じ合う。しかしこの結末の総括から浮かび上がって来るのは、そのような両要素の響き合いであると同時に、両者の乖離でもある。かつて「山の中」ながらも主要な街道の宿駅として外の世界につながっていた馬籠は、東山道鉄道工事の変更にともなって「世紀の洪水」から取り残され、以前とは逆に外部から遮断されたのである。このまったき封鎖によって、馬籠あるいは半蔵は、「魂の根」を失って洪水に溺れるわが国の近代化のコースに対する批判者としての位置を決定的にした。半蔵を葬る鍬の響きは、彼の空転せざるをえなかった情念を鎮める弔いの声であるとともに、その「まこと」を踏みにじった「維新」や「文明開化」に対する抗議の声にほかならない。(12)

十川氏が「抗議の声」と言うように、確かに半蔵の哀切感を漂わせた作品が、作者の「時代批判」の視点で描かれていると見ることは可能である。「自己を確立する方向性を持ちえぬわが国の昏迷」に対して、平田国学を判断の基準に持ち、強い信念の持ち主であった半蔵の意欲と情念は「空転せざるをえなかった」。十川氏は『夜明け前』が、半蔵たちに対してそうした状況の中で展開していくことを余儀なくさせた幕末・維新を批判した作品であると指摘したのである。しかし、一方で、作品の末部で半蔵に漂う哀切感は、それは困難な時代を懸命に生き抜いた半蔵像ゆえに感じさせるものであるということに間違いはなく、この点に着目した論として伊豆利彦氏は、

半蔵の生涯は挫折と敗北の生涯であった。しかしその生涯をつらぬく熱い精神は、その挫折と敗北の故に無意味なものとしてなげすてられるべきであろうか。藤村は今日によみがえらせようとした。（略）藤村はそれを、空しく葬り去られた名もなき民である父の生涯を掘りおこすことによって実現した。そのことによって、維新の現実を生きた民衆の生活と労働の姿が新しく照らし出され、維新の現実はかつてない広さと深さで描き出された。父の生涯を探るという私的ないとなみが、日本の民衆の現実と革命的伝統をあきらかにし、日本の歴史と民衆の現実に根ざした「まことの革命への道」をさぐり求めるものとなったところに、『夜明け前』の世界を成立させた藤村のリアリズムの独自な意味がある。

と述べている[13]。十川氏の指摘するように、半蔵の意欲と情念を「空転」させるような「夜明け前」の「時代」ではあったが、伊豆氏は、そこにはその困難な「時代」を戦い抜いた半蔵の「生涯をつらぬく熱い精神」を見逃してはならず、むしろその半蔵像に託された「維新の精神と理想」において「まことの革命への道」を探り求めようとしたところにこの作品の主題があるとされている。

この作品が、実際の島崎正樹像よりもはるかに深く平田国学に心酔し、価値の判断の規範を置く青山半蔵を中心に構成された物語であることはすでに指摘した。新政府の神祇局から教部省への変換と、教部省の施策変更が端的なように、半蔵の期待が裏切られ孤立していったことと、平田国学が結局は新時代において批判されていったことは、同

じ視点に於いて描かれている。即ちこの作品の主題は、伊豆氏の指摘する時代の問題よりも更に、半蔵に於ける平田国学との関連において見る必要があるといえよう。

高阪薫氏は、この平田国学と半蔵像に着目した視点で、的確に指摘している。氏は

『夜明け前』にみる半蔵の悲劇を思想的原因から見れば、平田国学徒の政治や歴史認識に甘さがあり、それ故に維新運動で柔軟な適応が為されなかったからだといえよう。

と指摘し、そして、藤村の昭和十六（一九四一）年の「回顧」を取り上げて、

半蔵が信じた「中世の否定」「新しき古」の建設は維新後も頑なに守られ、他に妥協することもなくついに、迫り来る圧倒的な西欧文明に太刀打ちも出来ぬまま敗北と帰す。『夜明け前』のこのような悲劇を、藤村の『回顧』にみる意見は、「中世の肯定」「本居学の再認識」という立場にたって半蔵（父親）が実践的平田学徒へと短絡していった思想と行動を対立的に批判している。

と述べている。更に平田学徒の失敗を、

明治維新において、平田学徒が柔軟な思考をせずして、将来の判断を誤ったものとして批判されている点なのである。

とし、『夜明け前』はそうした平田国学の柔軟さの無さと、半蔵の平田国学への短絡的傾注にあったとされている(14)。

藤村が後の『東方の門』において、日本の歴史と近代日本の生成に触れて、近代日本が諸外国、特に西欧に対して日本が伝統を保ち得てきたのは、かつて父等が否定した「中世」があったからだということを強調し、その「中世」に対する再認識によって、日本が真に「東方の門」足る国になり得ると主張していることはすでに考察した(15)。この『夜明け前』においては、そうした日本における「中世」の否定という、〈父〉と平田国学の幕末・維新に対する判断の欠陥を指摘する意識を対局にして、しかし、ともかくも、激動の中を木曾の山中に一庄屋として、そして時代が変

っても、その責任を「固持」して生き抜いた父が、何故そのような生き方をしなければならなかったのかという必然を、「父の時代を知」[16]（「回顧」）り、父の生きた足跡の「真相をも読み」（「春を待ちつつ」）とり、平田国学の幕末に於ける〈真〉を尋ね、今日の人たちの精神形成につながる近代日本の〈夜明け前〉の「その由来するところ」（「春を待ちつつ」）を求めようとしたところに、『夜明け前』の壮大なドラマを描きつつ藤村が見据えていた信念を見ることが出来るのである。

註

(1) 「覚書」（『桃の雫』）「中央公論」昭和十一（一九三六）年一月、『藤村全集』十三巻、二九二頁。
(2) 山崎斌、明治二十五（一八九二）年――昭和四十七（一九七二）年。長野県生まれ。作家を志望し藤村に師事した。
(3) 「夜明け前を中心として」藤村・青野季吉、「新潮」昭和十（一九三五）年十二月一日、『藤村全集』十二巻、五四九頁。
(4) 「藤村妻への手紙」島崎静子編、中央公論社、昭和二十五（一九五〇）年、「大正十五年五月二日」の手紙。
(5) 藤村「『夜明け前』成る」（談話）（『東京朝日新聞』長野版　昭和十（一九三五）年九月十五日）『藤村全集』十三巻、三五三頁。
(6) 田中宇一郎『回想の島崎藤村』「四一、『夜明け前』起稿」昭和三十（一九五五）年九月、四季社、百八十七頁。
(7) 「回顧」（父を追想して書いた国学上の私見）、昭和十六（一九四一）年一月、『藤村全集』十三巻、四六二頁。
(8) 「夜明け前を中心として」（前掲）『藤村全集』十二巻、五四八頁。
(9) 『春を待ちつゝ』「前世紀を探求する心」、大正十四（一九二五）年二月、『藤村全集』九巻、一九一頁。
(10) 平岡敏夫「『夜明け前』へ」シンポジュウム「島崎藤村と日本の近代」（「国文学」昭和四十六（一九七一）年四月号　学燈社、一九頁）
(11) 三好行雄「『夜明け前』三」、「解釈と鑑賞」三十一巻九号　昭和四十一（一九六六）年七月一日　至文堂、一二八頁。
(12) 十川信介『鑑賞日本現代文学4・島崎藤村』「夜明け前」角川書店、昭和五十七（一九八二）年十月三十日、二九三頁。
(13) 伊豆利彦「『夜明け前』の世界」、「民主文学」第一一六号、昭和五十（一九七五）年七月一日、日本民主主義文学同盟、

一九一頁。

⑭ 高阪薫「『夜明け前』の歴史観――半蔵と藤村の相違――」、「甲南大学紀要　文学篇」第十七号、昭和五十（一九七五）年三月十五日、七三～七五頁。

⑮ 細川正義「島崎藤村『東方の門』論――藤村における東と西――」、「日本文藝研究」第五十六巻第三号、平成十六（二〇〇四）年十二月一〇日、関西学院大学日本文学会。

⑯ 「回顧」（父を追想して書いた国学上の私見）、前掲、『藤村全集』十三巻、四六五頁。

⑰ 『春を待ちつゝ』「前世紀を探求する心」前掲、『藤村全集』九巻、一九一頁。

本稿は「島崎藤村『夜明け前』論（上）」と題して、「人文論究」第五十五巻第一号（二〇〇五年五月二五日、関西学院大学人文学会）に掲載したものに続くものです。あわせてご覧くだされば幸甚に存じます。

（ほそかわ　まさよし・関西学院大学文学部教授）